

先週私たちは、聖霊を受けた弟子たちを代表して、ペテロが人々に語ったメッセージの内容について見ました。神様は、預言者ヨエルを通して「終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ」と約束しておられましたが、そのことが、ペンテコステの日に、聖霊が弟子たちに注がれることで、いよいよ現実のものとなったのです。そして、その聖霊を注がれた方こそ、ナザレ人イエスであるとペテロは証しました。ユダヤ人たちは、この方を十字架にかけて殺しましたが、でも神様は、この方を死よりよみがえらされ、今や主ともキリストともされたのです。

そのメッセージに対する人々の応答が、今日のところです。37節「人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、『兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか』と言った」。「神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです」というメッセージに、人々は腹を立て、ペテロも主と同じ目に遭わせようとするのではなく、むしろ、彼らはそれによって心を刺されます。「自分たちは、なんてことをしてしまったんだろう！」という後悔と恐れの念にかられた、ということができましょ。これこそ聖霊のみわざです。聖霊は、語る弟子たちにだけでなく、聞く側の人々の心にも働きかけることで、彼らの罪を示し、彼らを神様のもとへと導かれました。

心を刺された人々は、ペテロたちにこう尋ねます。「私たちはどうしたらよいでしょうか」と。「キリストを十字架にかけて殺したのは、あなただ」と言われて、「そうですか」と穏やかにいれる人はいないでしょう。そこには「何で私のせいなんだ！」と腹を立てるか、それとも、ここでの人々のように心刺されることで「私はどうしたらよいですか」と助けを求めるかのどちらかの応答になると思うのです。

ペテロのメッセージを聞いた人々にとって、それは決して聞きやすいものではなかったことでしょう。文字通り、それは彼らの心を刺すものでした。でも同時にそれは、彼らをして主の救いへと近づけられるために必要なことでもありました。というのも、「私たちはどうしたらよいでしょうか」と尋ねることで、救いの道を知ることになったからです。38節「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう」。

ペテロは言います。「悔い改めなさい。そして、主の名によってバプテスマを受けなさい」と。これが人々をして、また私たちをして、主に救われるために求められることです。「悔い改め」とは、180度向きを変えること、方向転換を意味します。それはちょうど水泳の選手が25M(か50M)でターンして向きを変えるのに似ています。それまで自分一人で生きていた自己中心な歩みから、神様の方へと向きを変えること、それが悔い改めです。

そのように神様の方に向くなら、主イエス・キリストによる罪の赦しと永遠のいのちが恵みとして与えられ。だから、彼の名によってバプテスマを受けないと言われているのです。ここで皆さんにお聞きます。ペテロは、ここで「信仰」ということばを使っていませんが、それはなぜでしょうか？ペテロは、悔い改めて、洗礼を受けたら、信仰は必要ないと言っているのでしょうか？

主イエスを救い主として信じることと、主の名によってバプテスマを受けることとは、一つです。それは別々のことではなく、同じことを意味します。つまり、主イエスを信じる者が、主への信仰の告白として受けるもの、それがバプテスマです。それは信仰の第一歩、主への従順を意味します。ですから、信じた後、洗礼を受けるまでに多少備えの期間があったとしても、信じるなら、バプテスマは当然のこととして受けるべきです。それによって主への信仰が公の場で証され、そこから主に従う歩みが始まっていきます。

今私は「救われるため」という表現を使いましたが、ペテロは、どういう表現を使っていますか？「それぞれ罪を赦していただくために」と。主イエスの方では、罪人の代表としてご自分が十字架で死なれることで、すべての人が赦されるための贖いのみわざを成し遂げられました。ですから、この御子の犠牲によって、神様は私たち罪人を赦すすでに決めて下さったのです。そういう意味で、すべての人はすでに赦されています。ただ、その赦しを自分のものとして受け取るために、主の名によってバプテスマを受ける必要があるのです。

ですから、悔い改めて、主の名によってバプテスマを受けた人は、罪赦されています。でも、「罪赦された」では終わりません。ペテロは続けて、「そうすれば、賜物 (Gift) として聖霊を受けるでしょう」と言うのです。この時、ペテロと使徒たちはすでに聖霊を受けていました。でも、その同じ聖霊が、主の名によってバプテスマを受ける者にも与えられるとペテロは告げるのです。

なぜ聖霊なんなのでしょう？なぜ洗礼を受けたら、「もう病気にならない」「問題がなくなる」「金持ちになれる」「自分の夢が叶う」といった約束ではなかったのでしょうか？そうでなく、神様は聖霊を下さるのでしょうか？聖霊とは何ですか？それは神様の霊、御子イエスの霊です。この方が与えられるとは、私たちをして神様と一つにされること、神様が私たちのうちにいて下さることを意味します。そうだとしたら、病、お金、人間関係の問題どころではないのです。この天地万物を創造し、今もそれを治めておられ、私たちの将来を保証して下さる神様がともにおられるのですから、何も恐れることはない、ということにはならないですか？

40節「ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、『この曲がった時代から救われなさい』と言って彼らに勧めた」。こうしてペテロのことばを受け入れた人々は、その場でバプテスマを受けます。その数は、三千人ほどであったとあります。それは実に大きな数でした。でも、それで終わらないのです。バプテスマを受けた人々は、救われたことに満足して帰ったという話ではありません。

42節「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた」。悔い改めて、罪赦されるためにバプテスマを受けた人々は、使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈る者となりました。ここには、彼らが聖霊を受けたということは記されていません。でも、それを理由に、私たちは彼らが聖霊は受けなかったという結論に至ることができますか？

この42節の動詞は、英語では「Devote」という単語が使われています。つまり、人々は、使徒たちの教えとしての主の教えと互いの間の交わりに、また、パンを裂くこととしての主の晩餐と祈りとに自分自身をささげていた、専念していた、ということです。皆さん、聖霊を受けることなしに、主の教えに従うことができますか？この後に記されていることですが、彼らは持ち物をみな共有していました。聖霊の導きなしに、そのような交わりがもてるのでしょうか？主の晩餐にあずかること、祈りに専念することはいかがでしょう？

ここで見る初代教会の歩みは、彼らをして聖霊を受けた結果、聖霊に導かれていた証拠だと私は思います。なぜなら、それは自分を中心として生きる者にはできないことだからです。聖霊が、彼らのうちに信仰の一致をもたらすことで、彼らは持ち物を共有し、心をつにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神様を賛美しました。聖霊が、そのような歩みへと彼らを導かれたからです。

そして、もう一つ、私がここで注目したいこと、それは 43節に記されています。「そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって多くの不思議としるしが行われた」。この「恐れ」とは「恐怖」ではなく、「畏敬の念、尊敬」を意味します。主を信じ、主と一つにされるバプテスマを受けた人々は、主の教えを守り、交わりをし、聖餐にあずかり、祈りをしている中で、その心に畏敬の念としての主への恐れが生じたというのです。これもまた聖霊を通して神様が彼らに与えて下さった恵みと言えるのではないでしょうか？

というのも、私たちはどうしたら主への恐れを持つことができますか？あなたは「主を恐れよ」と誰かに言われることで、本当に自分が主を恐れる者になると思いますか？聖書通読の歴代誌下もいよいよ終わりに近づきましたが、そこには主のみこころに従う王もいれば、主を恐れず、悪の道を進む王もいます。若い時には主に従っていたけど、歳を重ね、王としての力を増し加えると、高慢になり、主から離れる者たちもいたのです。

そのような人々のことを思いながら、私は自分も彼らと何ら変わらない者であることを思われます。私は王ではないので、一国の王になることがどういうことなのかはわかりません。でも、その心において主への恐れがなければ、主から離れてしまう者、条件さえ整えば、神様の嫌われる罪をいくらでも犯す者であると思うのです。そんな者にとって、主への恐れがうちにあるということは何と幸いなことでしょうか。

ここでも、聖書は「聖霊がその恐れを生じさせた」とは告げていません。でも確かなことは、賜物として聖霊を受けるという約束を信じて、主の名によってバプテスマを受けた人々が、その後、主の教えと交わり、聖餐と祈りに自分たちをささげる中に、恐れが彼らの心に生じたということです。そして、その「恐れが生じた」の後に、「使徒たちによって多くの不思議としるしが行われた」と続くのです。主は力あるお方ですから、いつでも、どんなことでも主にはおできになります。でも、主は、聖霊に導かれるご自分の民の間で、また、彼らを用いて、多くの不思議としるしを行われるのです。

いかがですか？ 今日あなたのうちには、主への恐れがありますか？ もしないとするなら、あなたは、主の教えと交わり、主の晩餐と祈りに自分自身をささげておられますか？ そのことを機械的に行った結果、主への恐れが生じるとは思いません。でも、バプテスマを受け、約束の御霊をうちにいただいているなら、このような歩みが伴うはずなのです。そして、主は、そのようにご自分のみことばと交わりに、聖餐と祈りに専念する者に、ご自身の栄光を聖霊を通して現してください。そして、主のすばらしさを知れば知るほど、私たちのうちで畏敬の念、恐れは生じるのです。これが初代教会の姿、私たちが目指すべきところです。

47 節の最後「主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった」。主は、そのようなご自分の民に、毎日救われる人々を加えられました。ここでの主語は誰ですか？ 弟子たちですか？ 主です。主が、救われる人々を起こされたのです。このことを私たちは心に留めたいと思います。なぜなら、私たちとしては主から大宣教命令を受けているので、当然、宣教に重きを置いて生きるべきです。でも、それは救われた者が、主の弟子として聖霊に導かれて歩むことを通してなされるもの、そのように教会がともに主において生きることを通して、主もそこに救われる人々を加えて下さるのです。

では、主が救われる人々とはどんな人ですか？ 39 節「なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです」。ペテロは「すべての遠くにいる人々」と言いつつ、同時に「私たちの神である主がお召しになる人々」といいます。つまり、神である主は、ユダヤ人たちも、そうでない遠くにいる人々もすべての人をこの救いに招いておられます。ただ、すべての人がそれを受け入れるわけではないのです。福音を聞き、心刺された者だけが、「私はどうしたら良いのですか」と神様の御前にへりくだり、助けを求める人です。主はそのような人々をご自分のもとに召しておられるのです。

それが誰なのかは私たちにはわかりません。でも少なくとも、自分に関しては、その中に自分が含まれていることを願うからこそ、私たちは主に今日も礼拝をささげているのではないのでしょうか？ そうであるならば、聖霊に満たされ、導かれることを切に求めようではありませんか。そして、聖霊の力によって、主の教えと交わりに、主の晩餐と祈りに自分自身をささげる者とさせていただこうではありませんか。すでに聖霊が賜物として注がれているからです。